

第10章ではAAの歴史や症例が提示されているが、最後に「嗜癖治療におけるパラドクスの処方」として、著者の治療論が述べられている。「嗜癖は……治療の初期に『治療不能』を宣告することが必要な珍しい病気である」「この『治療不能の宣告』と『どんな底体験』は『断酒（嗜癖の中断）の維持の物語』という恰好の対象を見出すきっかけとなるのである」等は以前常識として考えられていた。最近は「治療不能の宣言」や「底付き体験」に否定的な意見もあるため賛否両論あるだろう。また「治療者無力の処方……の徹底（治療者の絶望）だけが嗜癖者を回復させる唯一の道であることがあり得るという事実の持つ逆説性は、嗜癖というものの本質を露呈しているように思われる」というのはまさにその通りである。特にこれを困難にしているのは「治療者ナルシシズムという困った病気であるということだ」と著者は述べているが、嗜癖の臨床医は自分の自己愛を満足させるために、治療を行ってはならないということ忘れてはならない。あくまで治療者はせいぜい患者の伴走者程度でしかないことを覚えておくべきであろう。

ガスライティングという支配

関係性におけるトラウマとその回復

アメリア・ケリー著
野坂祐子訳

日本評論社、四六判 272頁、2,420円、2024年7月刊

（帝京大学心理臨床センター・NPO法人女性心理臨床ラボ）

笠井さつき

ガスライティングという言葉をご存じだろうか。1944年イングリッド・バーグマン主演MGMフィルムの名画『Gaslight（ガス燈）』で、美しい主人公が夫に心理的支配を受ける物語に関連するこの言葉は、「心理的な手段によって、相手に『わたしは正気なのか』と自分自身を疑わせるように仕向けること」と定義された、ガスライター（加害者。映画では主人公の夫）のパワーへの欲望により生じる関係性トラウマを表す。とくに親密空間の中で（主に）女性が自分の判断力に自信を失う過程で、ガスライ

ターの用いる心理的手段としては、「そんなことは、まったくやっていない」という否認や論点のすり替えなど、あくまで物理的暴力を伴わない心理的な追い詰めである。本書はその最初のページに『「わたしには、何の価値もない」と思っている女性たちへ』と記されている通り、こうした手段によりガスライターに支配された（主に）女性たちが、その関係性において自分に起きていることを正しく理解し、境界線をとりもどし、自尊心とセルフラブを高めるための、知恵と勇気の詰まったエンパワメントの一冊である。

著者のアメリア・ケリーは、私設カウンセリングオフィスでメンタルヘルスに関わるセラピストとしての女性支援の豊かな経験を背景として、その語りには大変説得力がある。また訳者はトラウマ・インフォームド・ケアの第一人者でパワーとコントロールという力関係の勾配に洞察の深い野坂祐子氏であり、トラウマケアの手引としての本書の価値も高い。

ガスライティングは、カサンドラ症候群、共依存、ヤングケアラーなど、関係性の困難を対象化したキーワードと重なる部分もあるが、より意図的で悪意がある点で、加害・被害の関係が明確である。前述の映画も、最後は主人公を救う別の魅力的な男性が登場することで、ガスライターである夫の悪事が暴かれるという勧善懲悪的な展開となっている。しかし、著者も述べるように、ガスライターになるのにも理由や背景があり、その被害者となるのも同様である。そして現実には当然ながら勧善懲悪ではなく、加害者支援の視点も必要である。いずれにしても、心理的・物理的暴力という行為そのものに関しては、その背景にどのような事情があってもけっして許されるものではない、という視点をゆるがさないことはこの議論において大切である。

評者が日々の臨床で出会う女性たちの、「私さえ我慢すれば」「生活力も経済力もないので」「子どもがいるから」という苦しい声からは、パートナーとの関係を一方で対象化しつつも、単純に加害と被害の関係に2分割しがたく絡み合う複雑な感情が見えてくる。そこに、本書の「境界線をつくる」「強固な結びつきから解放されるための手続きとしてのゆるし」などのワークが変化を生むだろうか。一人の女性の心が自由になることで、負の世代間連鎖は断ち切られるだろうか。それが可能な社会でありたいと、心から願う。

原書：Amelia Kelley：Gaslighting Recovery for Women：The complete guide to recognizing manipulation and achieving freedom from emotional abuse

ウィルフレッド・ビオン 未刊行著作集

クリス・モーソン編
福本 修訳

誠信書房，A5判174頁，3,630円，2024年7月刊

(さくら精神分析研究室) 清野百合

英国の精神分析家ウィルフレッド・ビオン（1897-1979）は、メラニー・クラインの分析を受けクライニアンに位置づけられながらも次第に独自の理論を提示し、精神病や思考の発達に関して精神分析的な理解を深めることに寄与した。また彼は、数学や神秘主義思想などさまざまな観点から精神分析を捉えなおす試みを続けた。そのプロセスは、1940年代の集団に関する論文、1950年代の精神病に関する論文、1962年から1970年にかけての代表的な4冊の理論書、1970年代のセミナーや講演の記録および戯曲形式のフィクションなどの数々の出版物によって、辿ることができる。

けれども、そうした出版から残念ながら漏れてしまった著作もある。本書には、そのように出版に至らないまま眠っていたビオンの四つの小論が収められている。まず一つ目は、「人間をどう概念化するか」（1961）である。これは同タイトルで出版される予定だった本の一章として書かれたものだが、結局その企画は実現しなかったため、本論文が発表されることはなかった。理論書『経験から学ぶこと』の基礎となる概念や、クラインの投影同一化と内容-容器（コンテイナー-コンテインド）の関連についてなど、前期ビオンの諸概念のビオン自身による解説を、読者は目にすることができる。

二つ目は「貫く沈黙」で、これは1976年12月14日にロサンゼルスで行われた講演の準備としてビオンが録音したテープから、彼の妻フランチェスカが

書き起こした記録である。音、あるいは音がないことをめぐる彼の自由連想風の語りの講演に続き、参加者からの質問に応じて、ビオンは「直観」や「分からなさを持ちこたえること」など、後期ビオンで頻繁に出てくるアイディアに言及している。

三つ目の「新しく改良された」は、1977年9月20日にロサンゼルスで精神分析協会で行われた講演の記録である。この一風変わったタイトルは、当時のケロッグのコーンフレークの箱の宣伝文句からの引用であり、いかにも皮肉屋のビオンらしい題となっている。アンドレ・グリーンから教わった「答えは好奇心の不幸である」というモーリス・ブランショの言葉を彼は紹介し、性急な答えを求めることや「より良くなる」という誘惑的なうたい文句に警鐘を鳴らしている。

そして四つ目は、1968年4月から1969年8月までの彼の思索のメモ書きをまとめた「続・思索ノート」である。本記録はビオンの思索を辿るうえで重要というだけではない。彼は1968年にイギリスからロサンゼルスに移住しているのだが、このメモの中には移住当時のビオンの私的な思いも散見され、ある意味で日記のような要素も含まれている。

以上の四つのテキストに加え、本書には「付録A～D」としてさらなる資料が含まれている。中でもフランチェスカがビオンについて語った「私たちの人生の日々」というタイトルの彼女の手記は、ビオンの仕事および人物像を知るうえで貴重な資料となっている。4本の未刊行の著作および付録はいずれも、ビオンの代表作の背景を理解する際の貴重な資料であり、ビオンに関心のある方には是非一読を薦めたい。

原書：Chris Mawson (Ed)：The Complete Works of W.R. Bion Volume 15, unpublished papers